

想い出〜少年へ〜

松橋健一

人間の記憶とは、なぜにこうも曖昧なのだろう。つい二三日前のことでも思いだせないことがあるかと思えば、数十年たった今でも、昨日のことのように鮮明に思い出せることがある。なぜ、思いだせないことがあるのだろう。思い出したくないなにかがあるのだろうか？ それとも頭の中で消し去りたいなにかが、思い出すのを邪魔するのだろうか？ 今、思い出したい過去がある。どうしても思い出せない過去がある。

健ちゃん

自分のことを「ぼく」って呼んだことがない。思い出せる限りの過去をたどっても、まったく記憶にない。近所のおばさんに、

「僕っ」

と呼ばれても自分だと気が付かなかつたくらいだ。物心ついたころには、自分のことを「健ちゃん」と呼んでいた。名前が松橋健一だから、周りが「健ちゃん」と呼んでいた。で、自然と、自分でも自分のことを「健ちゃん」と呼んでいた。親からも健一ではなく、健ちゃんと呼ばれていた。

幼稚園に通っていた時も、自分のことを、健ちゃんと呼んでいた。幼稚園の時の担任の先生、高橋先生も、健ちゃんと呼んでくれていた。「松橋君」と、呼ばれたことはなかったと思う。とてもとても優しい先生だった。何か特別な想い出があるわけではないが、ただ、優しかったなあ、と記憶している。

泣き虫

弱虫だった。泣き虫だった。小さい頃から泣いてばかりいた。上に四つ違いの姉（みえ

ちゃん」がいたが、姉は強くて泣かない子供だったのに、男の自分は何かといえば泣いていた。いつのことだか忘れたけれど、父方の田舎に遊びに行った時など、飼い牛が鳴くたびに泣いていた。これは記憶にあるのか、周りからしばらく言われ続けていたので、そのように覚えていいのかわからない。

「モウちゃんが鳴いた」

と言っでは泣いていた。田舎の親戚にも当然のように、健ちゃんと呼ばれていた。「泣き虫の健ちゃん」だった。言ってみれば、ただ甘やかされて育っただけなんだろうが。

母親が、PTAの役員などをやっていたものだから、夜帰りが遅くなることがあった。(と言っても九時か十時頃だと思うが) そんな日は、寢床に入ってもなかなか寝つけず、グスグスと泣いていた。母親が帰ってくると、泣いていることで叱られた。そんな記憶がある。

田舎の親戚

この頃、姉は夏休み(小学校の何年生かはわからない)に、一人でほとんど一カ月田舎にいたことがある。毎日、お輝おばさんのしよい籠に乗って(入っつてと言っべきか)、畑や田んぼに行っていたらしい。無論、健ちゃんはそんな大それたことはできるはずはなかった。往きと帰りだけ、父親と母親にくっついて行くだけだった。

その頃の電車は、木製の内装で、外は茶色い色をしていて、網棚は文字通り網。チョコレート電車と呼んでいた。ガタゴトと田園風景の中を走っていく電車に乗るのは、本当に楽しかった。あまり余裕ではなかった我が家では、普段は買ってもらえない、少年マガジンか少年サンデーを買ってもらえるのが楽しみだった。週刊誌なのだから、その時だけ買ってもらっても話の筋などわかるわけもない。それでも必死で読んだ記憶がある。いったいいくらだったのだろう、あの頃の少年マンガ雑誌は。

夏に田舎に行くときは、冷凍みかんを買ってもらえることがあった。カチカチに凍っていて、なかなか食べられるものではなかった。今でもあるのだろうか? 結局全部は食べられなくて、半分融けたみかんを土産に、健ちゃんは親戚の家へ行っていった。

いっだったか、親戚に病人がでて、かなり遠くまで病氣見舞いに行ったことがあった。そのとき親戚のおにちゃんに、コココーラ飲むかと聞かれて、わけもわからず飲んだ覚えがある。いや、飲まなかったのかもしれない。はっきりした記憶はない。どちらにして

も、ユカコーラとの初遭遇であったことは、間違いはない。

生活は楽ではなかったはずだが、田舎には良く連れて行ってもらった。両親が、田舎育ちだったからだろうか、田んぼや畑、空の星など、様々な風景を見せてくれたのだろう。そのころでももう、都会では星は見えづらかった。もちろん現在よりは、はるかにまじだったが。

俺

「ぼく」と言えなかった健ちゃんに、重大なピンチが訪れた。小学校に入学することになったからだ。幼稚園は小学校の附属だったので、通うことには抵抗はなかったが、周りが一変したのである。園長先生と校長先生は同一人物だったのだが、応対が全く変わってしまった。小学校は厳しいのである。

自分のことは、すべて自分でやらなくてはいけない。この当たり前のことができなかった。ランドセルが、まともに背負えなかった。致命的である。今思えば、肩のベルトの付け根部分に、ビニールがついたままだったので、ベルトが開きにくかったのだ。そんなイヤな想い出は忘れないものだ。万事そんな感じだった。幼稚園からの友達とも、なぜかよそよそしく、友達作りに難儀していた。そこで健ちゃんは困ったのだ。自分のことをどう呼べば良いのか。わからない。まさか、今更「健ちゃん」でもないだろうとは、さすがに感じていた。最初の数日間は、なんとなく無難にこなしていた。(しかし、その間にも隣の子に、ランドセルを机にかけてもらったりしていた)

次第に仲の良い友達ができてくる。その時自分をなんて呼べばいいのか？ 悩んだ。真剣に悩んだ。そんな時には救世主が現れるものだ。ガキ大将的存在の、ふじくんが自分のことを、「俺」と言っているのだ。それに倣ったのか、周りで「俺」と呼んでいる生徒が増えていくのだ。これだ！ 健ちゃんは翌日から自分のことを、「俺」と呼ぶようになった。小学校一年生が「俺」である。それも呼びなれていない。しかし、家に帰れば、やっぱり自分の事は、健ちゃんなのである。田舎に行けば、こちらも相変わらず健ちゃんなのである。

どちらにしても、健ちゃんには新しい第一歩だったのだ。

ふじくん

ふじくんとは、早い時期から仲良くなった。幼稚園は違うので（保育園かもしれないが）それまでの、ふじくんのことにはわからない。小学一年生で自己紹介など、きちんとできるはずはない。

「俺、ふじたけ。ふじって呼んでいいよ」

「おっ、おれっ、健一。健でいいよ」

ふじたけの漢字はいまだにわからない。ふじたけだったかどうか、疑問だ。ふじくんが良いのだ。しかし、ここで思いもよらぬ事がおきた。みんなが自分のことを、健ちゃんと呼ぶようになったのだ。脱皮したはずの「健ちゃん」が、また現れてきたのだ。何とも言えない感情だった。

だが次第に、俺にも友達が増えてきた。ふじくんの次に仲良くなったのは、なべちゃんだった。たぶん、渡辺だったと思うのだが、確証はない。完全に忘れてしまっている。三人は、それから行動を共にするようになった。学校ではもちろん、登下校する時も一緒だった。肩を組んで歩いた。別に硬派でもなんでもなかったのだが、いつも男三人だった。今考えると、三人とも不安だったのかもしれない。ふじくんにしても、なべちゃんにしても、「俺」なんてそれまで使ってなかったのだろうか。

そんな三人組に女の子の仲間が加わった。ひろこちゃんだ。ひろこちゃんは、自分と同じ幼稚園だったので、前から、良く知っている。自分のことを「健ちゃん」と呼んでいたことを知っている一人だ。そのところが、実は気恥ずかしい。それがなぜ仲間になったのかというと、偶然にも、教室で隣に座ることになったのだ。

「よろしくね、健ちゃん」

「あっ、ああ、うん」

こういうときは、女の子の方が大人だ。健ちゃん（いや男子と言っべきか）は、まったく不甲斐ない。給食も一緒に食べるようになり、親密度は、幼稚園のころとは大きく変わり、ずいぶんと深まった。健ちゃんと、ひろこちゃん、ふじくん、なべちゃん、そしてひろこちゃんの友達のかずみちゃんが、ひとつのグループになった。みんなの名字は記憶にない。しかし、不思議なもので、妙にませていたせいか（あるいは考えすぎか）、学校が終わってからは、女の子と一緒に遊ぶということはめったになかった。それこそ恥ずかしくて仕方がなかったのである。

だいたい遊ぶ場所は決まっていた。家の玄関に、ランドセルを投げ捨て、ただいまもなく遊びに出かけていた。何の事はない、学校前の公園に集まり遊ぶだけで、さつきまでと、さほど変わらないのである。ときどきだが、女の子、それも、ひろこちゃんやかずみちゃんに出会うことがある。意味もなく緊張感が走る。

「一緒に遊ぼうよ」

「いいよ、だけど女だつて最煩なただぞ。泣くなよな」

何を言っているのかわからない。支離滅裂になっているのだ。

「缶けりやるぞ！」

遊びなど、レパートリーが極端に少ないので、ほとんど毎日が缶けりだった。あとは、犬のようにあちらこちらの公園を見て歩き、何事もないことを確認して一日が終わるのである。やはり肩を組みながら。

缶けりをやるからには、蹴らなくてはならない。この時ばかりは、ふじくんもなべちゃんも関係ない。自分が蹴らなければ、男がすたるのである。ましてや、女の子に負けるようなことがあつてはならないのである。

しかし、現実には厳しいものだ。健ちゃんは運動神経が鈍い。ドン臭いのである。だいたい、ふじくんが蹴っていたと思う。健ちゃんは、隠れたまま動向を探つて、ふじくんが蹴るのを見て、わくわくと出て行くのであった。また、ふじくんは男気もあった。ひろこちゃんやかずみちゃん(女の子)が鬼になってしまうと、たまにだが、

「俺、鬼やつてやるよ」

ふじくんが鬼になると、だいたいみんな見つかってしまう。ふじくんは足も速かった。健ちゃんは、隠れっぱなしで、毎回終わっているのだった。夕方、日が暮れてくるまで、真剣に遊んでいた。

「女の子は、もう帰れよ」

ふじくんが言う。説得力がある。実は、自分達ももう帰らなければならないのだ。早く帰りたいのだ。

「またね、明日学校でね」

「また遊ぼうね」

こんなことを言われると、三人とも緊張してしまっていた。

「おうっ、じゃあな」

これだけ言うので精いっぱいだった。だが、内心嬉しくて仕方がなかったのだ。

秘密基地

このころは、街中に空き地が多かった。土管や材木など建設資材が置きっぱなしの空き地がたくさんあったのだ。こういう場所は子供たちの、特に男の子連中には格好の遊び場所だった。まずは秘密基地だった。かつてに板を持って来ては、土管と組み合わせて、小さな小屋を作っていた。まさにホームレスそのものだ。その中に、宝物、と言っても大したものではなく、酒ぶたやビンの王冠、メンコなんかを隠しておいた。大概は、二、三日後には壊されて、宝物もなくなっていた。

第二ラウンド

遊びは、ここまででは終わらなかった。銭湯がある。下町だったせいか、銭湯が多く、かなりの賑わいをみせていた。次は、銭湯で待ち合わせである。タオルと石鹸で、よくもあそこまでと思うほど遊んでいた。二時間はいたのではないだろうか。番台のおばさんは、早く帰らないとお父さん、お母さんが心配するよと、いつも言われていた。浴室内でも、オヤジたちに良く怒られた。しかし、本当に楽しかったのだ。

そう言えば、一度、洗い場で転んだことがあった。大きなコブを作って、泣きながら家に帰って、また怒られた。

喝采

学校で歌謡曲を歌うのは、暗黙のうちに禁止されていた気がする。そんな時代だったのかな？ だけでもどうしても一曲だけ忘れられない曲がある。みんなが、天地真理だとか西城秀樹だとかいっていた頃、時代はちよつとずれるかもしれないが、ちあきなおみの「喝采」が大好きになった。もちろんレコードなどは買ってもらえない。歌も難しく（内容も含めて）歌えなかったのだが。あの物悲しい曲は、今も耳から離れないくらいだ。そんなわけだから、ちあきなおみが引退した時は、ショックだった。

今でも「喝采」大好きだ。

お調子者

毎日の授業は、難しくはなかった。四つ上の姉、みえちゃんがいたせいで、早くから読書や算数に親しんでいたせいだろう。ドン臭い健ちゃんも、授業になるとここぞとばかり、ガゼン張り切った。体育と音楽の時間以外は。

体格もやせ気味で、風邪などはしょっちゅうひいていた。その分、算数や国語の授業では余計に頑張ったのだろう。だが、ここにも、手ごわいライバルがいたのだ。仲良しのかずみちゃんだ。そろばんとお習字を習っていた彼女は、計算も早く、字も綺麗だった。健ちゃんの字は、お世辞にも綺麗とは言えなかった。母親に言わせると、ゴミ溜めのひじきだそうだ。それでも算数の計算テストなどでは、誰よりも早く書き終え、最初に提出して、一番に教室から出ていくことに、快感を味わっていた。

ある時、こんなことがあった。引き算のテストだ。五十問ある。健ちゃんは早かった。五分とかからなかっただろう。その時は教室での机が、前から二番目だったので、やり終えたらすぐに教卓に持っていき、よせばいいのに、試験中のみんなに向かって、

「おまえら、まだできないのかよ」

とやったのだ。確かに早かった。しかしこれは余計だった。翌日テストが返された。九十八点。満点ではなかった。一番目の問題を、足し算していたのだ。ショックは隠せなかった。先生から赤ペンで、「足し算ではありません」と書かれていた。一年生の時の担任は、今野先生だった。その後、前言のようなことは二度とすることはなくなった。かずみちゃんはもちろん、満点だった。

新しい友

六月頃だったと思う。転校生がやってきた。たみである。目の大きな、やや小柄な男の子だった。何をきっかけにしたのか思い出せないが、たみとは急速に仲良くなった。それまで仲のよかった、ふじくん、なべちゃんに加えて、たみが入ってきたのだ。子供はどのような思考回路をしているのだろうか？ なぜだかわからないが、たみが来てからは、ふじくん、なべちゃんと何となく疎遠になっていくのがわかった。その事とは関係ないのだろうが、ふじくんはたみと入れ替わるように、夏休みを前にして、転校してしまった。ひとりになってしまったなべちゃんは、そのころ喧嘩が強くて、いじめっ子と言われていた、

このくん(だったと思つ)となぜか仲良くなつていった。その時、このくんは、五年生だったと思う。そんな事だから、クラスでもなべちゃんも孤立するようになっていった。みんな、このくんを恐れていた。しかし今考えると、このくんも寂しかったのかも。しれない。たった一人で、肩で風切つて頑張つていたのだと思つ。

みいちゃん

夏休みが近づいてきた。たみには、一つ違いの妹がいた。みいちゃんだ。みいちゃんをひろこちゃんやかずみちゃんに紹介したら、すっかり可愛がられて、妹分になつていった。そんなわけで、ひろこちゃんやかずみちゃんと遊ぶ機会も増えてきた。本当は嬉しいんだが、表面は仕方がないという装いで貫いた。

たみは、妹がいるせい、女の子と遊ぶのが、まったく平気で、ひろこちゃんやかずみちゃんと、学校でも仲良くしていた。(よく考えると健ちゃんにも姉がいたのだが)そんなたみが羨ましかった。自分と言えば、相変わらず女の子と話すのさえ苦手だった。これも仕方ないのだろうか。ただ、自分の思いこみが激しすぎるのだったと思つ。相手は、なにも考えてもいないのに。

真昼の墨汁

何故、どうしてだったか、まったく思ひだせないのだが、ある日授業が終わつてから、数人で習字をやっていたことがあった。いや、やらされていたのだと思つ。誰がいたのかも思ひだせない。ある時間から、先生がいなくなった。一年生である。やりたい放題になつた。半紙だけではなく、洋服、顔、等等、まさにボディペインティングさながらの光景だったのだろう。しばらくして先生が帰つてきた。忘れもしない、担任の今野先生だ。ド頭から怒鳴られた。そのままの格好で職員室に立たされた。五く六人だったと思つ。いや、もう少し少なかったかもしれない。他の先生からは、

「あら、凄いわね。お母さんに叱られるわよ」

などと声をかけられ、自分の惨状がおぼろげにわかつてきた。お互いを見まわし、再度確認した。ひどい有様だった。なぜ顔にまっ黒がついたのか(書いたのか?)思ひだせない。常識的にはあり得ないことだ。一年生とは恐ろしいものだ。何時になつたのか覚えていな

いが、一年生にしては遅い時間になったと思う。ようやく解放され、家路についた。家に
ついたら、まず母親に説明しなければならなかった。どうしてそうだったかは、まったく
覚えていないが、母親の言葉はハッキリ覚えている。

「紙が足りないから、顔にまで書いたって、明日先生に言え」

とのことだった。素直な健ちゃんも、翌日そのまま今野先生に伝えた。先生は大笑いした
と思う。いや、苦笑いだったのだろうか？ あまり定かではないな。とにかくそのまま伝
えた事は覚えている。そんな母親だった。

ちなみに、今野先生とは、今でも年賀状のやり取りをしている。

夏休み・I

待望の夏休みがやってきた。毎日缶けりではさすがに飽きる。その頃は、たまの他に何
人か友達も増えていたはずだが、覚えていない。確か五く六人は集まったと思うのだが。

たまにだが、野球まがいもやった。ビニールボールを手で打つ三角ベースだ。思い出せ
ないのだが、昼飯とかはどうしていたのだろうか？ 何時から何時まで遊んでいたのだろ
うか？ 記憶にない。ただ毎日遊んでいた。

おべった焼き

その他には、わずかな小遣いを貯めては、おべった屋に行った。この日は特別だった。
おべった屋は、鉄板のある駄菓子屋である。誰と行ったのかは思いだせない。ただ、最初
は自分で焼くことができなかったはずだから、みえちゃんに連れて行ってもらったのだと
思う。おべったは、地域によって呼び名が違うことを知ったのは、大学に入ってからだっ
た。

今で言う、もんじゃ焼である。ただ、その頃は具など何もない。メリケン粉を水で溶い
て、ソースを混ぜただけのものだった。確か五円からあったと思う。値段が高くなれば、
それだけ量が多くなるのだ。小さなコテで、ぐちゃぐちゃしながら焼いていき、ねっとり
したら（焼けたら？）食べられる。また、鉄板に焦げ付いたのも、はがして食べる。せん
べとか言っていたような気がする。なぜか異常に旨く感じた。おべったに行く日は、期待
で胸が高鳴った。大げさではない。あの頃は誰でもそうだった。少し小遣いに余裕がある

と、今のベビースターラーメンのようなものを買って、中に混ぜて焼いた。これは、またいっそう旨かった。このラーメンが、また安っぽくて、味のあるところとないところがあり、確か一袋五円だったと思う。しかし、おべったでは、昼飯にはならない。

夏休み・II

駄菓子屋といえば、そのころの男の子は、みな銀玉鉄砲を持っていた。あと玉は出ないが、赤い巻き火薬で音の出る百連発銃などもあった。銀玉鉄砲は、玉がないと始まらないので、取りあえずひと箱かふた箱（袋入りもあつたと思う）買う。あとは、撃ちあいの際に落ちた玉を拾っていた。なんとも情けないガンマン達だったのだ。

あとは何をしていたのだろうか？ 一か月以上もある夏休み。我が家は毎年のように、お盆には田舎へ行っていた。しかし、それにしても三日か四日のことだったはずだ。不思議だ。ただ、まだ空き地で原っぱが残っていたので、虫取りなんかもやっていたと思う。健ちゃんも、泳げなかったのので、プールなどには行かなかった。みんなは、近くのプールに良く通っていたようだ。

宿題は皆と同じように、最後の一週間でやつつけ仕事だった。家の者に手伝わしてもらっているのは、観察の絵日記などを見れば、すぐにバレていたはずだ。ある意味で、良い時代だったのだろうか。あの頃は夏休み帳なるものがあったて、一日一頁こなしていくと、きちんと終わるはずだった。それを最後の一週間でやるもんだから、天気の問題などはいい加減そのものだった。また二年生のころは、難しい自由研究などなかったので、平和な夏休みだったのだろう。それにしても、何をすすごしていたのだろうか？ 何も一年生だけではない。二年生から六年生まで考えても、ほとんど思い出せない。しかしまあ、大したこととはやっていなかったことは、間違いはない。

青い蜜柑

運動会は秋にあった。春には小運動会なるものがあつて、秋はそれに対して大運動会となっていた。こちらの方は、ドン臭い健ちゃんである、良い思い出があるはずがない。記憶したくなかったのだろう、何も覚えていないのである。人間都合のいいようにできているのだと思う。たったひとつ、徒競争で好きだった女の子に、大差をつけられた事だけ

は、何年生だったか忘れたが、鮮烈に覚えている。顔から火が出るとは、このようなことなのか。綱引きや玉入れなんかも、やったはずだが全く記憶にない。

運動会と言えば、終わりの挨拶（校長か？）の時に、空に赤とんぼがたくさん飛んでいたことだけだ。ずくつと見ていた覚えはある。そうそう、弁当の時間はかすかに記憶がある。いなり寿司が好きだった。栗とみかんが出始めの頃だったはずだ。青いみかんだったと思う。水筒の中身は決まって麦茶だった。他人の弁当なんて覚えていない。と言うよりも、見ていなかったと思う。家族も運動会での競技については、何も語らなかったと思う。語れなかったと言うべきか。

遠足

弁当と言えば、遠足にも、何度も行ったはずだ。こちらは写真が何枚か残っている。カラーがまだ一般的ではなかった、と言うとオーバーだが、確かに値段は高かった。クラスの集合写真は白黒写真が残っている。ただ、どこへ行ったのか覚えていない。あの頃は、春と秋に遠足があったはずだ。バスを仕立てて行くこともあった。写真が残っているものは、一年生の時、隣の動物園に行ったものだ。だが、あとはわからない。思い出せない。六年間もあったのに覚えている遠足がこんなにも少ないと言うのは、どうかしているのだろうか。

修学旅行は日光だった。これは覚えている。バスに乗って行ったと思う。このあたりは怪しいが。いろは坂を上っていく光景は今でも覚えている。猿がいたことを覚えている。このことは、かなり鮮烈に記憶している。珍しいこともあるもんだ。

不器用

そんなことから、授業のことも、詳しいことはあまり覚えていない。図工は好きだった。ただ、絵具をぬるのが下手で、下書きは上手く描けているのにと、先生に言われることはしょっちゅうだった。正直、内心ではショックを受けていた。ここでもドン臭かった。工作はあまり得意ではなかったと思う。糊づけは今でも下手だ。はみ出してしまう。不器用なのはそれだけではないので、あきらめてはいるが。

しかし、なんで六年間も小学校に通ったのに、こんなにも記憶が乏しいのだろうか？ 一、二年の頃ならまだしも、六年生の頃ぐらいならば、いくらか覚えていても良さそうなものだ。なのに、一年生の頃と同じ程度の記憶しかない。漠然とだが、小学校時代は、良い思い出がなかったと言うことは間違いない。いじめに近いこともあったと記憶しているし、小学校三年生の頃から、太りだしてドン臭かった健ちゃんが、さらに鈍くなった。このことも大きな事件だった。目立つことを避けるようになってしまったし、四年生から通いだした予備校のことで、いろいろ言われたこともあった。イヤな思い出である。その予備校も長くは続かなかった。とにかくイヤだった。なにもかもイヤだった。

おでん屋のばあさん

小学一年生の頃。この頃、足しげく通っていた駄菓子屋は二軒あった。ひとつは、おでん屋といった。もうひとつは、学校裏のおまけ屋。

おでん屋のばあさんは怖かった。何かにつけて注意された。それでも何故か毎日のように通っていたと思う。ここには、おでん屋と言うとおり、おでんの屋台が店の端っこにあった。良く大人が木の長椅子に腰かけて、おでんを食べていた。今思うと、酒も出していたのかもしれない。自分自身は一度もおでん屋のおでんは食べたことはなかった。いつも良い匂いをさせていたものだった。

もうひとつのおまけ屋は、学校の裏ということもあり、名札なども扱っていた。ただし、名前のように、おまけをしてくれたということは、一度もなかった。なぜ、おまけ屋という名前になったんだろう？ 気がついたらそう呼んでいた。先に書いた、おべった屋はこのどちらでもない。おべった屋には、駄菓子はあまりなかった。店の中央に鉄板があったので、その周囲に駄菓子がこそごとと並んでいただけだった。あくまでも、おべった屋は、おべったを食べに行くところだった。ただ、そんな店もいつの間になくなっていった。小学校の三〜四年生の頃には、もうなかったような気がする。最後に食べたのも覚えていない。本当に残念だ。

あと名前を覚えている駄菓子屋に、たまご屋と金魚屋というのがある。たまご屋は学区外だったので、行くときには、大いに緊張したものだ。何かにつけて、自分のテリトリカ

ら出ていくというのは、緊張したものだ。金魚屋は文字通り、金魚を売っていた。駄菓子も豊富で、結構繁盛していたような気がする。学区内だったが、自分はいんまり通わなかったが。

公園

駄菓子屋の事を考えているうちに、公園のことを思い出した。いつも遊びに行っていた公園は、学校の前の公園だった。なんて呼んでいたのかは覚えていない。名前なんて関係ない。その頃は、公園の真中にローラースケートのコースがあった。ちょうど、ローラーゲームが流行っていた頃だ。コンクリートでできた、いかにも流行にのった代物だった。ここでは高学年になっても遊んでいた記憶がある。

その他には、土管公園。公園の砂場の中にコンクリートでできた土管があった。中に入って遊んだり上に登って遊んだりした。そう言えば、土管公園には紙芝居のおじさんが来ていた。バイクに乗って公園に着くと、太鼓を抱えて叩きながら町内を練り歩く。その音で子供が集まってくる。かなりの人数が集まったのを覚えている。本当は、駄菓子を買わないと、紙芝居を見てはいけないのだが。

紙芝居は古い内容のものが多く、その時でさえ、すでに時代遅れのものだった。売っているものは、基本的に駄菓子屋と同じようなものだが、クジ引きがあったり、かた抜き、おまけつきのものなどがあった。そう言えば、土管公園には、バクダンも来ていた。正確にはなんと言うのだろうか？ 米を持って行って圧力をかけて破裂させてもらうのである。ポン菓子と言うのだろうか？ そんな記憶もある。

他に名前を覚えている公園には、大きな滑り台のあるお山公園や、タイヤ公園などがある。どちらも学区外のため、低学年の頃には、ほとんど遊びにいかなかった。学年が上がって、自転車に乗れるようになってからは、テリトリが広がったと思う。そのころには、お山公園やタイヤ公園にも行くようになっていたはずだ。

もうひとつ忘れられない公園があった。ひろこちゃんのうちの、すぐ近くにあった、病院前の公園だ。ここには、あまり行かなかったのだが、なんせひろこちゃんがいる可能性が高いのだ。近くに行くだけで、緊張していた。このことは良く覚えている。だが、実際には会うことはほとんどなかったのだが。

エントツ

工場地帯が近かったので、空はいつも灰色だった。学校の写生の時間に、空を灰色に塗ったことを覚えている。これは母親から聞かされていたため、覚えているのだろうが、シートを干すと、点々と黒く煤のようなものが付いていたという。煙突は間近にたくさん見えた。小学校学区の中にも小さな町工場がいくつもあった。いまでは考えられないが、良く経営できていたと思う。そういう時代だったのだろう。社会科の授業で工場の調査みたいなことがあった。三十分も歩けば、七、八件ならすぐに済んでしまったことが、思い出される。近くには貨物線の線路もあって、踏切に貨物列車を見に行ったこともある。

その線路には、ローカル線も走っていて、工場に通う多くの人たちを、毎日運んでいた。この電車もチヨコレート電車だったはずだ。

小学校からは、高速道路も見えて、たくさんトラックが走っていた。公害の街だった。みんな貧乏だった。子供にはそれがわからなかったが。

ひとつだけ、あまりにもショッキングな事件を覚えている。ゆうこちゃんだったと思う。ゆうこちゃんの妹が、公害による喘息で、亡くなったのだ。これだけは忘れられない。その話を担任の先生から聞いた日は、みんななぜか、一日中沈黙していた。子供心に、なにか恐ろしいものが、この街に襲いかかっていることを感じていたのだ。

みんな貧しかった

近所には、在日の韓国・朝鮮人二世三世も多く住んでいた。クラスにも何人かいたらしい。でも、子供には日本名しかわからなかったから、そんなことは全く関係なかった。親たちはなにかと言いついていたらしい。今思えば、あの名前は日本名だったかなという名前もいくつもある。子供にはわからないところで、差別もかなりあったに違いない。生活保護家庭もずいぶんあったように思う。給食費を払わない子供がいたことを覚えている。一人や二人ではない。何人かいたはずだ。

また、昼間から酒を飲んで、大声で叫んでいるオヤジもいた。職人さんも多くいたような気がする。銭湯に行くと、背中にもんもんが入っている人が、一人や二人ではなかったと思う。ちよつと違つかもしれないが、今よりも、人がより人間臭く生きていたような感じを受ける。

消えた世界

気がつくど、いつの間にか、たみも転校していた。いつまで一緒だったのかも覚えていない。ひろこちゃんやかずみちゃんは、どうしてしまったのだろうか？ まったく覚えていない。今のいままで、小学校の同窓会を開いたことはない。いや、どこかで行っているのかもしれない。ただ、健ちゃんには声がかからないだけかもしれないが。自分は、中学はみんなと違うところに通ってしまったので、プツリと縁が切れてしまっている。特に会いたい人がいるわけではないが、何も覚えていない空白の時間を知りたいと思う。友達の中には、中学を卒業して、すぐに働きたやつも多くいたはずだ。一人や二人じゃない。工業高校に通って、卒業してすぐに道路工事の現場で、現場監督になって働いているやつを見た。それも大学の帰り、夜に酔っ払らって見た記憶がある。その時は身を隠すようにして通り過ぎた。なにか申し訳ないような気持ちでいっぱいだった。今も現場で働いているのだろうか？

遠い記憶

あの頃、小学生の時から、四十年近くが、過ぎようとしている。自分は、このままあの頃の事を、思い出せずに暮らしていくのだろうか。

誰か教えてほしい。それで良いのだろうか。それともみんなこんなものなのだろうか。いろんなことを忘れちゃったけど、ただ、あの頃遊び疲れて、家に帰る時の夕陽は、でかかったことは覚えている。